

蜜流刺士



落丁・乱丁の場合は
お取りかえ致します



風流劍士

昭和三十八年六月十日 発行

定価 三百三十円

著者 村上元三

発行者 矢貴東司

印刷所 小泉印刷株式会社

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋筋一丁目十二番地
電話(六七)四〇〇一、二番
振替東京六四三五一番

風流劍士・目次

陣馬之助	七
夜の霧	一八
むかしと今と	二九
くぐつ師の兄妹	四〇
大坂の町	五三
雨夜の娘	六三
伏見城攻め	七四
その前夜	八五
伊吹の山風	九七
竹仙人	一〇九
血の陣羽織	一二〇
山鷺	一三三
白猿尊者	一四四

柳生の庄	一四
宝蔵院胤舜	一六
揺れる掛け橋	一六
光る眼	一八
海賊如意丸	一九
船隠しの島	二一
人間元来無一物	二三
清須城下の雨	二三
黒い雲	二四
本野ヶ原	二五
蛇の眼	二六
恋と慾	二六
富士の白雪	二九

装
幀

御

正

伸

風
流
劍
士

陣馬之助

一

空には白い綿わたのような雲が一つ、ふわりと浮んでいる。馬之助でなくても、こうして草むらの中に寝ころんでいると、うつらうつらとして眠くなるような春の日射しが、降りそそいでいる。

山頂さんていに金山寺きんざんじがある、この金山かみやまの山間の、吉井川よしいがわの上流がさわやかな水音を立てている谷川のほとりの草むらの中に仰向けになり、さつきから空を眺めている一人の若い侍があつた。

身には立派な具足ぐそくをつけているが、身体つきもきやしやで、顔立ちも優やさしい。まだ二十才になつたかならぬかの年ごろらしい。刀も腰から外して、草むらの中にほうり出してある。

この若侍は陣馬之助じんばのすけといつて、宇喜多家うきまたの番頭ばんがしら三千五百石取りの陣玄蕃じんげんぱん允じょうの一人息子で、父親とは違ちがつて、勇ましいことが大へん嫌いな、このごろで言えは柔弱者にやうじやくものというわけであつた。

馬之助が、春の日射しに目を細めているとき、少し離れたところから鉄砲てつぽうの一斉射撃しやげきの音と、それに続いて陣鉦じんがね、

太鼓、法螺貝の音が聞こえてきた。

びくつとして頭をもたげた馬之助は、また草の上にひっくり返つて、ひとり言をいった。

「下らぬなあ。陣鉦、太鼓を鳴らして戦さごつこか。戦場で人を殺し合つて、勝つた負けたといつて、それが何になる。どうもおれは間違つた世の中へ生れてきたらしい。おれ一人、知らぬ国へ行つて、女や金に不自由なく暮せたら面白いだらうなあ」

大きなあくびをしたとたんに、こんどは近くで二三発の鉄砲の音がしたので、馬之助は、びくくりして起き上つた。

その姿を見つけて、山の中腹の径を走り下りてくる二人の具足姿の侍が、

「おう、馬之助のですか」

「なんだ、鉄砲など射つて。何かあつたのか」

「こちらで女の姿をお見かけではなかつたか。山家の娘のような身なりをして、われらの調練の様子を探っていたらしいが」

「さあ、誰も見なかつた」

「馬之助どのは、ここで何をしておられる」

「腹痛でな、ここで休んでいた」

「はあ、腹痛か。なるほど」

「陣押しの声を聞いて、急に腹痛を催おされたのであらう」

そう言つて、一人が大声で笑うと、

「早く来い。川下のほうを探そう」

他の一人がそういつて、二人は、また徑（みち）を走りおりていつた。

「ふん、どう馬鹿にされても、おれは平氣だ。おれは職（しやく）きなどは大嫌（きら）いだし、強（つよ）くなろうとも思（おも）うておらぬのだから」

また草の中へ引（ひ）つくり返（かへ）ろうとした馬之助の眼に、変（へ）なものが映（うつ）つた。

おや、と思（おも）つて眼をとめたのは、すぐ下の川の中を漂（たふ）い流れるように近づいてくる一本の細い竹であつた。それも、横（よこ）になつて流れてくるのではない。その竹は、まるで生き物のように立つている。すつすつと水を切つて岸へ近づいてくると、やがて、すつと竹は上へ延びた。いや、竹だけではない。竹をくわえた一人の娘が、水の中から立ち上つたのだつた。眼を皿（ひら）のようにしている草むらの中の馬之助には氣がつかず、頭から全身、水びたしになつたその娘は、風のような素早（すばや）さで木蔭（こかげ）へ走り込むと、はじめからそこに置いてあつたらしい包みの中から、ほかの着物を出して着換（か）へはじめた。

その娘の白い裸身（はだかみ）が、ちらりと眼に映ると、馬之助の上半身がよろめいた。両手で草をつかんだので、かさつ、と物音がした。

娘の白い顔が、ちらりとこちらを見上げると同時に、

「えい」

細い鋭（す）い声（こゑ）がして、白い右腕（うで）があがつた。

春の陽をきらりとはねて、一本の小柄（こぶね）が、馬之助のほうへ飛んできた。

「あつ」

馬之助は危うく、首をちぢめた。

「動くな。動けば、次の小柄が、そなたの眼へ飛ぶ」

「ま、待て。おれは何もしない。おどろいた女だな。いまの小柄で、おれは、すんでのところで咽喉を貫かれるところだつたぞ」

「そなた、見ていたね」

「うん、見ていた」

馬之助は、そつと首を出した。その娘は、もう身支度をすませて、こちらへ上つてきた。

「いまのは忍びの業か。竹の節をくり抜き、それをくわえて水中にもぐれば、いつまでも姿を隠しておられる、と父上に聞いたが。ふむ、そなた、女の忍者か」

それは、十七八の、色は浅黒いが、きれいな眼をした娘だつた。

「そなた、わたしの着換えているところを見たな」

「見る積りはなかつたが、声をかけては悪かろうと思つてな」

「この男、馬鹿知らん、そなた、宇喜多家の侍か」

「うむ、おれは戦いの真似事は嫌いだから、ここで寝ころんでいた。そなた、水から上つたときは山の娘のようであつたが、いまは傀儡師のような身なりだな」

「声を出して、ほかの侍をお呼びなさるか」

「そうだな。いや、それより、そなたの顔を見ていたほうがよい。そなた、名は何という」

「この男、いよいよ馬鹿だ。では、おさらば」

「これ、待て、もう少し話して行け」

「ええ、放せ。えい」

引きとめようとした馬之助の手をとると、どんな業を使つたのか、馬之助は、わつと声を曳いたまま、もんどり打つて眼の下川の川の中へ落ちていった。

もう娘の姿は、草むらの中に隠れて、笑い声だけが遠くなつていった。

二

豊太閤秀吉が歿して二年、豊家五奉行のひとり前田利家も世を去つた後、徳川家康は、次第に天下に勢力をのばしてきたが、それに対して石田三成、上杉景勝が相呼応して兵を催おし、打倒家康の氣運が強くなつてきた。

この動きに対して家康も、戦備を進めていたころ、中国岡山城にある西軍の首脳、宇喜多中納言秀家も、亡き秀吉の恩顧に報いようと、連日のように城下より北に当る金山のあたりで、激しい戦鬪訓練を続けている。

その訓練の有様を、小高い丘の上から熱心に観戦していた五十年配の、いかめしい顔立ちをした武将がある。宇喜多家の番頭役の陣玄蕃允であつた。

「間もなく徒士組が押し出すぞ、茂兵衛。馬之助は何うした」

「はあ」

その側に片膝をついて控えていた家来の丹治茂兵衛は、困つたような返事をした。年のころ四十二三の、小さな眼をしたのが何か好人物らしく見える。

「最前から馬之助の姿が見えぬ。何んとしたぞ」

「はい、若旦那様は」

「徒士組の中に姿が見えぬ。いかがした」

「それがその、急の腹痛と申されました」

「なに、腹痛だと。馬鹿な」

と玄蕃げんぱん允じようは、茂兵衛の頭の上から怒鳴りつけた。

「本日は、実戦と同様の訓練だ。武士が戦場に出て腹が痛い、戦さはやめだ、などと勝手が申せるか」

「申訳ござりませぬ」

「そのほうが詫びることではない。どこへ行つたのだ。馬之助は」

「それが判りませぬ。わたくしにも」

「ええ、情けない奴め。腹痛なづなどと称して、逃げ隠れているのであろう。この宇喜多家にて、さる者ありと知られたる侍さむらい、大将の陣玄蕃允じんげんぱんに、あのような意気地なしの伴がいるかと思えば、わしの腹の中は煮えくり返るようだわい」

「ご推察すいさ申し上げます」

「黙れ、家来にいたわつて貰わずともよい」

「はあ」

と茂兵衛は、草むらの中に平身低頭へいしんていとうした。

遠くから、徒士組集まれえ、という号令けいれいがかかり、法螺貝はちがひの音が、晴れた空に響きわたつた。

「それ、徒士組の出陣じや。何処へ行きおつたか、馬之助め。早う探して参れ、茂兵衛」

「はあつ」

茂兵衛は、横つ飛びに丘を駆け下つた。

えい、えい、えい、やあ、という陣押しの声と太鼓の音をうしろに聞きながら、茂兵衛は、吉井川の上流のほうまで、汗びつしよりになつて徑をのぼつてきた。

「若旦那様あ、馬之助様あ」

そこまで来て、また声を張り上げたとき、すぐ下の谷川のほうから、

「おうい、ここだ、茂兵衛、助けてくれえ」

「あ、若旦那様だ」

あわてて茂兵衛が、草むらを分けて谷川のほとりへ下りて行くと、びしょ濡れになつた馬之助が、川岸にへたばつてゐる。

「ど、どうなされました、馬之助様。この陽気に水泳ぎなさるとは」

「馬鹿を申せ。水泳ぎをしたのではない。この川に、ほうり込まれたのだ」

「いつたい誰が若旦那様を川の中へ」

「うむ、それが、このあたりでは見たこともない美しい娘だな」

「お情けない。女風情に川の中へ投げ込まれるとは」

「お前はそういうが、それが普通の娘ではない。明らかに忍びの業を心得ている女だ。わしが捕えようとした手を逆にとられて」

「やれやれ、川の中に投げ込まれたのでござりまするか」

「何しろ相手は手強い女だ。わしの力ではとてもかなわぬ」

「ようわかりました。それどころではござりませぬ。殿様が、早う馬之助を探して参れ、と大へんなご立腹で」

「お父上に、なんといつたのだ。茂兵衛」

「急な腹痛で、と申し上げました」

「それでも戦さごつこをせよ、と言われるのか」

「武士が戦場へ出て、腹が痛いから戦さはやめだ、などと勝手が申せるか」

「よし、わかつた。子の心、親知らずだ」

三

その夜、城の曲輪内にある陣玄蕃元くまわの屋敷では馬之助を取りまいて、さつきから今日の調練のときの不始末が問題になつていた。

馬之助を前に置いて、父の玄蕃元は苦り切つているし、母の道芝みちしばも、馬之助につけられている家来の丹治茂兵衛も、なんとかして馬之助を説得しようとしている。

「馬鹿者が。武士の家に生れながら、なんという腑甲斐ふがいなさだ。泳ぎ一つ知らぬゆえ、そのような不ざまなことになる」

「しかし父上、具足の重みおもさというものは大そうなものでござります」

「小言を申す張合いもないわ。本日の調練ちようれんで、そのほう、家中の笑い者だ。父のわしまでが恥を慥まじいた。当分は屋敷から出るな。禁足を申しつける」